



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	これからのために : サイエンスコミュニケーションとCoSTEP の取り組みを振り返る
Author(s)	川本, 思心; KAWAMOTO, Shishin
Citation	科学技術コミュニケーション, 33, 63-71
Issue Date	2023-09
DOI	https://doi.org/10.14943/108266
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/90443
Type	departmental bulletin paper
File Information	jjsc33_p063-071_Kawamoto.pdf



小特集ノート：寄稿

これからのために～サイエンスコミュニケーションと CoSTEP の取り組みを振り返る～

川本 思心¹

For the Future-Reflections on Science Communication and CoSTEP Approaches

KAWAMOTO Shishin¹

キーワード：CoSTEP, 歴史, プログラム, 職

Keywords: CoSTEP, History, Program, Career

1. サイエンスコミュニケーションについて改めて問い直す

皆さん、こんにちは。北海道大学 CoSTEP、科学技術コミュニケーション教育研究部門代表の川本思心と申します。本日は、シンポジウムにご参加いただきありがとうございます。シンポジウムの最初に私から、趣旨説明をしたいと思います。

本日のタイトルは、「サイエンスコミュニケーションはなぜ必要なのか。ひらいて、むすんで」です。ご覧のとおり、キーワードとして「サイエンスコミュニケーション」という言葉があります¹⁾。この「サイエンスコミュニケーション」とは一体なんなのか、ということ問い直すのが、今回のシンポジウムの趣旨のひとつです。

とは言え、何も定義がない状態だと話が進みませんので、ひとまずサイエンスコミュニケーション（科学技術コミュニケーション）を「科学がもたらす問題、あるいは科学が解決のために期待されている課題に対して、特定の個人や特定のコミュニティに限らず、さまざまな人々、コミュニティを結んで解決を目指していく」と定めて話を進めたいと思います。こう定めたとしても、サイエンスコミュニケーションとは、どのように活動するのか。何をを目指すのか、といった点で非常に多岐に渡る意味を持っています。それを整理しようという試みが今回のシンポジウムです。



図1 講演の様子

2023年7月2日受付 2023年8月2日受納
所 属：1. 北海道大学理学研究院・CoSTEP
連絡先：ssn@sci.hokudai.ac.jp

2. 2005 年の「元年」からを振り返って

ここで、年表を使ってサイエンスコミュニケーションというものを整理してみたいと思います²⁾。この図は、科学技術振興機構 (JST) が作った年表をもとに CoSTEP が作成したものです (図 2)。まず、注目してほしいのは、科学技術基本計画³⁾です。これは、国が定めたもので、科学技術政策をどうやって進めていくのかという考え方が示されている文書です。その中にいわゆるサイエンスコミュニケーションについての言及があります。この基本計画は 5 年毎に作られています。その書きぶりを見てみると、その当時、期待されているサイエンスコミュニケーション、あるいはその当時考えられていたサイエンスコミュニケーションを読み取ることができます。

例えばですが、1996 年の第 1 期のときには、「学習」や「理解の増進」、「関心」といったキーワードがあります。一方で、最近の 2016 年や 2021 年の第 5 期や第 6 期だと、「共創的科学技術イノベーション」、あるいは「総合知」といったように、単に科学の問題や学習の問題ではなく、実際に何かを生み出す、作り出す、それもサイエンスだけではなくて、いろいろな知を統合していくといった意味合いに変わっていったことが読み取れるのではないかと思います。ちなみに、CoSTEP は 2005 年に立ち上がりました。また、2005 年には、北大だけではなく、東京大学や早稲田大学、他の大学やいろいろな組織で、科学技術コミュニケーションの教育組織が立ち上がりました⁴⁾。そのため、この 2005 年はよく「日本におけるサイエンスコミュニケーション元年」と言ったりします。

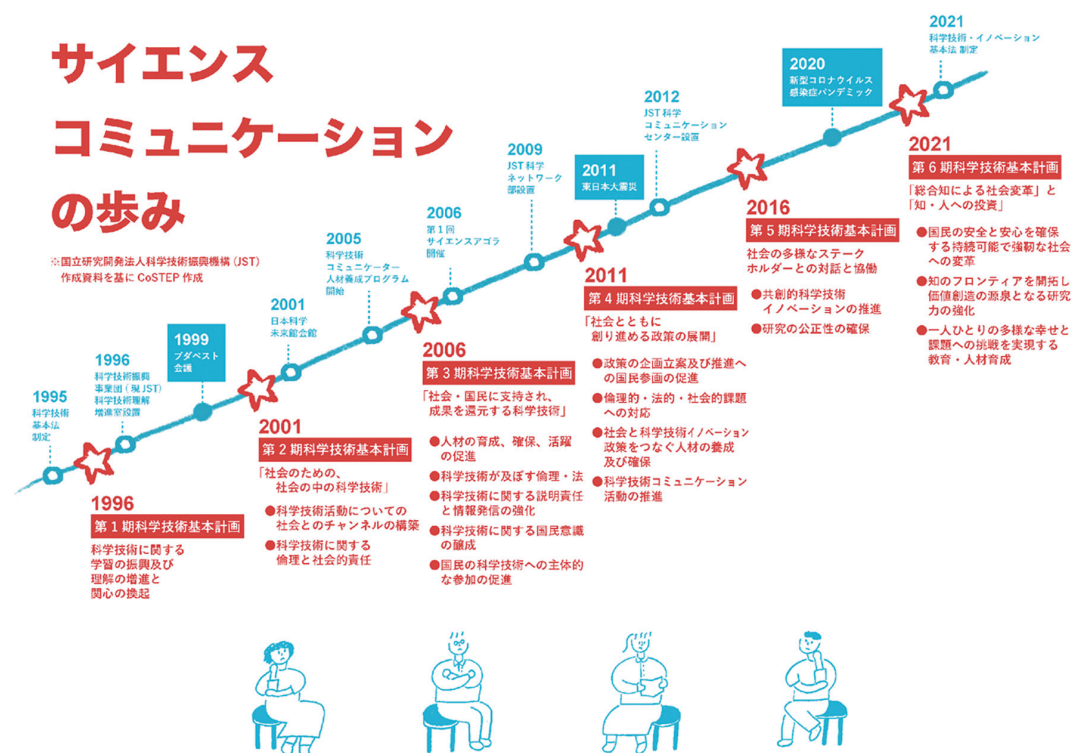


図 2 ひとつの歴史のまとめ方としての年表

ただ、この年表を最初に出しましたが、あくまでもこれはひとつの歴史です。皆さんがこの年表を見て、「あれが抜けているのではないか」、あるいは「自分はこのときああいう活動をしていた」というように、いろいろと思いつくのではないかと思います。皆さんそれぞれに、何か自分で付

け足したいものがあるならば、それがとても重要な歴史であり、皆さんにとってのサイエンスコミュニケーションのイメージなのかなと思います⁵⁾。

サイエンスコミュニケーションは、この元年を起点とするか、もっと先を起点とするか、これはいろいろな議論があります。けれども、2005 年を仮に起点とした場合でも、もう 20 年ほど時間が経っているわけです。そして、その中で様々な活動が行われ、先ほどいったように基本計画の中でも言葉が変わっています。実際の出来事としても東日本大震災がありました。最近だとコロナの問題もあります。こうした実際の出来事によってサイエンスコミュニケーションへの期待や批判が、その度に大きくなって、それに対して我々はどうしたら良いかというような議論が繰り返されてきました。

今日は、そういったサイエンスコミュニケーションというものの広がり、様々になされてきた活動の広がりを、もう一度振り返るため、様々な組織の方々をお招きして、議論を結び、これからのサイエンスコミュニケーションを考えていこうという趣旨になっています。

3. サイエンスコミュニケーションを担う組織：登壇者紹介

サイエンスコミュニケーションを担う組織はたくさんあります。CoSTEP もそのひとつです。詳細はまた後ほど私からご紹介いたしますが、CoSTEP は北海道大学の教育・研究・実践組織です。学生だけではなく、社会人の方も受講できる 1 年間の科学技術コミュニケーターを養成するプログラムです。他にも様々な形で教育や実践活動をされている組織があります。今回のシンポジウムは大阪大学、国立科学博物館、それから大学や研究組織ではなくて、実際のお仕事としてサイエンスコミュニケーションの活動をされている科学コミュニケーション研究所の 4 カ所、4 名が 15 分ずつお話をし、そのあとパネルディスカッションでサイエンスコミュニケーションの課題について議論をするという内容になっています。

それでは、私から今回のシンポジウムの登壇する方を簡単にご紹介させていただきます。最初に、私自身について自己紹介いたします。私自身も CoSTEP の受講生でした。博士課程の学生のときに受講をして、現在は代表をしております。私からは CoSTEP の特徴と、その活動概要をお話いたします。

次に、大阪大学 ELSI センター／CO デザインセンターから水町衣里さんをお招きいたしました(水町 2023)。大阪大学は非常に特徴的な取り組みをされていて、最近 ELSI センターという組織も立ち上がり、企業と連携をしたり、萌芽的な科学技術に関してレポートをすばやく積極的に出したり、非常に注目の活動をされています。次、国立科学博物館から小川達也さんをお招きいたしました(小川 2023)。小川さんも東大のインタープリターを修了されている方ですが、現在は YouTuber として非常に活躍されているので⁶⁾、見た方もいらっしゃるのではないかなと思います。そして、最後、白根純人さん。白根さんは、現在、合同会社科学コミュニケーション研究所の代表のお一人でいらっしゃいます(白根 2023)。

私もいろいろ活動していますが、この 4 名の方と会う機会というのは意外とあるようではありません。サイエンスコミュニケーションの「業界」は、広いようでいて狭い、狭いようでいて広い。サイエンスコミュニケーションのことについて意見をぶつけ合う、議論する場合は、意外とあるようでなかったのですけれども、今回、こういった機会ができることを大変嬉しく思っています。

ということで、私からの挨拶は以上といたします。

4. CoSTEP におけるサイエンスコミュニケーション

そのまま続きまして、私から CoSTEP の取り組みについて話題提供をいたします。先ほど簡単に自己紹介をしましたけれども、私もドクターのときに、私の指導教員の先生が CoSTEP の立ち上げをバックアップしていたこともあって、「何か始めているな。何か怪しい動きをしているな」と横目で見えていました。そして「どうも面白そうだ」ということで飛び込んで、紆余曲折、気がついたら、いまここにいるという状態です。なので、私のキャリアや、科学との関わり方に関して、非常に大きな影響を与えてくれたプログラムであります。私のバックグラウンドとしては、生物学なのですが、現在はサイエンスコミュニケーションの教育、研究、実践をやっています。

CoSTEP のロゴをご覧になった方、いらっしゃると思いますが、これは雪の結晶をシンボル化したものです。さらにテーブルを囲んで人がグルッと囲んでいる。そういった対話を象徴しているようなシンボルマークになっています。CoSTEP は何をしているかと言いますと、教育・実践・研究のみつつです。このみつつを連携させながら進めていく。これが CoSTEP の特徴になります。

4.1 教育・実践・研究の三本柱

教育としては、いまこのシンポジウムを主催している、「科学技術コミュニケーター養成プログラム」というプログラム。これが CoSTEP の基幹的な事業になります。他にも学部授業⁷⁾や、大学院授業⁸⁾も実施しています。それから、実践として、代表的なものを3つ挙げるとしたら、まず「サイエンス・カフェ札幌」⁹⁾があります。サイエンス・カフェ札幌は2005年から始めていて、いまではいろいろな組織がこの紀伊国屋のスペースで様々なイベントをするに至っています。そして、2012年から始めた「いいね！Hokudai」¹⁰⁾です。当時はまだFacebookをやっている大学組織はあまりなかったのですが、CoSTEP はそれにもチャレンジして現在もう10年以上経ちました。それから研究です。サイエンスコミュニケーションを単なる実践に終わらせてはいけない。それを研究し、記録して、着実にその知見を残し、つなげていく。これが非常に大事です。そのため、専門誌『科学技術コミュニケーション (JJSC)』¹¹⁾を発行しています。

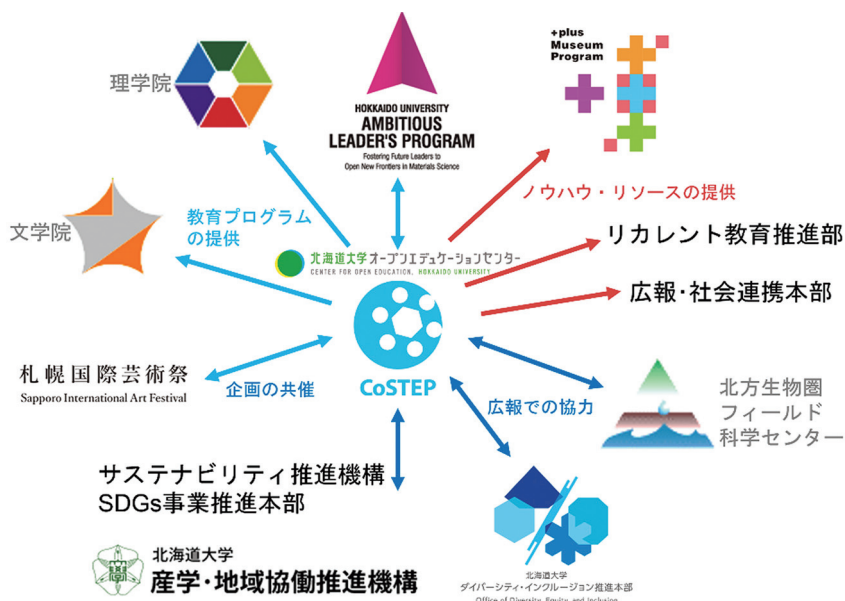


図3 CoSTEP と連携・協力する学内組織

CoSTEP の特徴は、単に単一組織で動くだけではない、という点にあります。ここがまさにサイエンスコミュニケーションだと思うのですが、様々な学内外の組織と連携・協力して、ひとつの組織ではできなかったことを実現しようとしています。CoSTEP はオープンエデュケーションセンターという組織の中のひとつの部門ですが、理学院や文学院、あるいはリーディングプログラムといった教育組織に対して教育プログラムを提供しています。それから、リカレント教育推進部¹²⁾ のような社会人教育の組織に対してその人材やノウハウを提供することもやっていますし、広報・社会連携本部と広報で協力しあっています¹³⁾。それから、北方生物圏フィールド科学センターや産学・地域協働推進機構、ダイバーシティ・インクルージョン推進本部、こういった組織と連携して広報のコンテンツを作ったり、それを広げたりということを担っています¹⁴⁾。また、近年では、札幌国際芸術祭と共同の企画を実施しています¹⁵⁾。

こういうふうに、この絵で見ると CoSTEP が全て中心になっているような感じで、ハブ的な組織を目指しているというのがあります。ただ、別な絵の書き方、別な言い方をするとすれば、CoSTEP は出島みたいな組織なのです。最近、出島組織サミット¹⁶⁾ という組織の方とお話する機会があって、「CoSTEP も出島だな」と思ったのです。要するに、本土とは違うことをする。外とつながって、本土に新しいものを入れていく、そういうのはみ出たスピーディーな組織であるという特徴がある。中の世界と外の世界をつないでいくという、まさにそれが CoSTEP が担う、そして期待されている役割なのだと思います。

4.2 多様な人々が集う科学技術コミュニケーター養成プログラム

話を戻したいと思います。CoSTEP の基幹的な事業である科学技術コミュニケーター養成プログラムです¹⁷⁾。この略称も CoSTEP と言いますけれども、これに関しては三つのコースがあります。本科、選科、そして研修科です。サイエンスコミュニケーションというのは、非常にいろいろな分野が関わっています。もちろん自然科学もそうですが、人文社会科学の知識やスキルも必要になってきます。さらに、理論だけではなくてスキルの習得や、実践をする。これを1年間で全て学ぶというのはなかなか難しいことなのですが、やはり我々としては1年間で、まずサイエンスコミュニケーションを大きく捉えて、体験してほしいという目的から、超充実したプログラムを組んでいます。そのフルセットが本科です。講義だけではなく、演習があります。そして本科の受講生は例年20名少しくらいで、四つの実習のうちのどれかのひとつに入って実践をします。今日の午前中も、その成果発表会がありました。

次に選科。こちらは、講義は本科と同じものを受けますけれども、道外の方にも学びの機会を開くということで、昔からeラーニングで授業を配信しています。授業をオンラインで受けつつ、選科Aは夏に、そして選科Bは秋にそれぞれ3日間札幌に来て、Aがオンラインサイエンスイベントの企画と実施、Bはサイエンスライティングに取り組んでいます。

そして、最後に研修科です。「1年間ではなかなか自分のテーマを掘り下げられなかった」、「もう少しこの学びのネットワークを生かして実践したい」という方のために研修科を用意しています。これは本科、選科を修了した人だけが入れるコースで、自分のテーマを自主的に進めていただくものです。

今年度受講生の内訳は本科が21名、選科が46名、研修科が4名です。北大の学部生や大学院生で約3割です。他大学の学部生や大学院生が1割少しくらい。それ以外の方は社会人です。中には他大学の教職員の方、北大の教職員の方もいます。北大のプログラムではありますが、半分以上は北大以外の方がいらっやっています。これがCoSTEPの面白さであり、強みだと思っています。

サイエンスコミュニケーションで重要なことは、冒頭で私が「サイエンスコミュニケーションと

は何だ」ということでも暫定的な定義をしましたが、特定のコミュニティに閉じこもってはいけない、ということだと思います。ですので、教育の場を大学院生対象だけにしようと、どうしてもそこに限界が出てしまう。もちろん、違う専攻の大学院生同士で話し合うだけでも面白いのですが、さらにそこに社会人が入ると、実践でどういう困難を抱えているのかを知ることができる、あるいは「社会人ってこんなぶっとんだことをしている人があるんだ」と、学生にとってものすごく大きな刺激になります。それは私も過去、CoSTEPを受講していたときに強く感じたことでもあります。こういった社会人と大学院生、学部生と一緒に学ぶという、この構成がCoSTEPのサイエンスコミュニケーションの目指す世界、学びの形というのを体現しているのではないかなと思います。

4.3 これまでの蓄積がもたらした変化

そういった形で、今年度で18期になりました。昨年度17期までで、のべ1,174名の方が修了しています(図4)。年によってばらつきはありますが、毎年70名~80名の方が受講してくれていて、ちょっとしたサイエンスコミュニケーションのイベントや集まりに行くと「CoSTEPですか?」、「あなたもCoSTEPですか」といった会話がかわされるのです。これはとてもありがたいことで、やはり同じ学びの基礎を共有することで、ちょっとした情報共有や、コラボレーションがやりやすくなるのです。先ほど、CoSTEPが中心にあり学内外のハブとなっている絵を示しましたが(図3)、それが可能になっているのも、やはりCoSTEPの受講生の中には学内の職員の方、教員といった方も結構いらっしゃるのです。そういった方々が修了後も折に触れて、情報共有をする。「何か面白いことができないか」、「こういうことを一緒にしませんか?」といった連携した活動ができるようになってくる。

そういった流れの積み重ねが、やはり2005年当初とは全く違う、様々な活動を可能にしているのだと思います。北大の中だけではなく、恐らくその外の世界でも、そういったことはちょっとずつ起きてきていると私は思います。このことについては、パネルディスカッションでお話ができたらと思います。

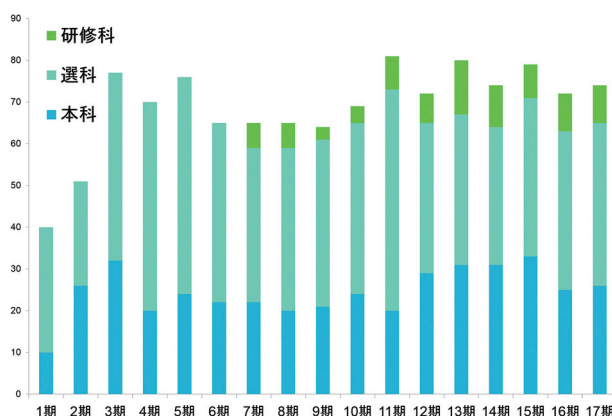


図4 2005年度(1期)から2022年度(17期)までの修了者数

5. サイエンスコミュニケーションを社会につなげ、社会を作っていくために

とは言っても、やはりCoSTEPでの1年間の学びはある意味、学部1年生の授業のようなところがあります。基礎実験もあるし、とても大事な教養授業もある、けれどもまだ専門に特化してはいない、といったようにです。やはり何らかの専門的な分野について深く理解し、サイエンスコミュニケーションを自分ごととして語り、実践できるようになるには、1年や2年の学びだけでは充分ではありません。これはサイエンスコミュニケーションに限らないことだと思います。

そこでさらに実践の中で学ぶ必要があります。ただし、この実践で課題があります。サイエンス

コミュニケーションに関する公募を見ることがありますが、要件は経験者とするものが多く(小林・中世古 2019),「こんな人そうそういませんよ」という高い技能が求められることも少なくありません。そこで、ちょっとしたお仕事をし、実績を積んでいき、職に繋げるということに関しても、やはり CoSTEP は少しずつアプローチしていかないといけないと考えています。

いままでも個人ベースでは行われていましたが、もう少し組織化して、たくさんいる修了生を社会にまさにつなげていって、CoSTEP 修了生に関わらずいろいろなサイエンスコミュニケーションを担っている方と結んでお仕事を作っていくということで最近始めたことのひとつが「SciBaco (サイバコ)」です¹⁸⁾。SciBaco は、サイエンスコミュニケーターのためのデータベースサイトです。まずひとつ目の機能としては、「サイエンスコミュニケーターにはこういう人がいるよ」ということを示すインタビュー記事があります。次に、Profiles では、いろいろなサイエンスコミュニケーターを探せる仕組みが実装されています。それから最後、Sharing では、公募情報などを掲載しています。興味のある方はぜひ SciBaco に登録をしてみてください。

ということで、私からは CoSTEP のお話をいたしました。

注

- 1) 「サイエンスコミュニケーション」か「科学コミュニケーション」か「科学技術コミュニケーション」か、といった名称問題は毎回巻き起こる、重要でありつつ瑣末で、瑣末でありつつ重要な議論である。本企画で登壇した4組織の名称もそれぞれ異なるため、シンポジウムおよび本稿では固有名称以外は「サイエンスコミュニケーション」で統一した。なお CoSTEP がその名称を「科学技術コミュニケーション」とした経緯については杉山 (2014, 109) が詳しい。
- 2) 図2は科学技術振興機構のウェブサイト「科学コミュニケーションについて知りたい: 背景と歴史」に掲載されている図より作成。このページにはその他にもサイエンスコミュニケーションの歴史について簡潔にまとめられている。 <https://www.jst.go.jp/sis/scienceinsociety/background/> (2023年7月30日閲覧)。サイエンスコミュニケーションの展開や定義については Kupper et al. (2021) や標葉 (2016)、大塚 (2018) も参照。
- 3) 科学技術基本計画とは、平成7年に制定された「科学技術基本法」により、政府が科学技術政策を実行するために策定しているもの。令和2年に科学技術基本法が「科学技術・イノベーション基本法」に変更されたことに伴い、令和3年4月からは「科学技術・イノベーション基本計画」に名称が変更されている。直近のものは、第6期科学技術・イノベーション基本計画であり内容については次のウェブサイトを参照。 <https://www8.cao.go.jp/cstp/kihonkeikaku/index6.html>。 (2023年7月30日閲覧)。
- 4) 東京大学では、科学技術コミュニケーション部門 (2023年度まで大学院総合文化研究科・教養学部附属教養教育高度化機構の名称) が科学技術インタープリター養成プログラムを行なっている。 <https://sci.com.c.u-tokyo.ac.jp/> (2023年7月30日閲覧)。また、早稲田大学では科学技術ジャーナリスト養成プログラム (略称: MAJESTy) が設置され、2010年度からは名称を科学技術ジャーナリズム・プログラムとして活動している。
- 5) 数量的な分析をしているわけではないが、『科学技術コミュニケーション』誌において、冒頭で科学技術基本計画に言及して議論を展開している論考は数多く見受けられる。実際にその研究が科学技術基本計画といった国の施策と強い関連があるのであればもちろんかまわないが、自らの研究の「歴史」の基点は本当にそれなのか、という点について、もっと批判的であってもよいのではと考える。
- 6) 小川氏は【国立科学博物館公式】かはくチャンネルは YouTube で見ることができる。 https://youtube.com/@museum_kahaku (2023年7月30日閲覧)。
- 7) 学部授業として「北海道大学の「今」を知る」(前期2単位, 2010〜)、「北海道大学を発見しよう」(後期2単位, 2010〜)を開講している。 <https://costep.open-ed.hokudai.ac.jp/undergraduate-education>

(2023年7月30日閲覧).

- 8) 大学院授業としてライティングを学ぶ「大学院生のためのセルフプロモーションⅠ」(春ターム1単位, 2008~), グラフィカルアブストラクトを学ぶ「大学院生のためのセルフプロモーションⅡ」(春ターム1単位, 2008~), プレゼンテーションを学ぶ「大学院生のための研究アウトリーチ法」(夏ターム1単位, 2008~), そして「アートで現代を考える」(夏ターム1単位, 2022~)がある. <https://costep.open-ed.hokudai.ac.jp/postgraduate-education> (2023年7月30日閲覧).
- 9) サイエンス・カフェ札幌は2005年度から継続して実施しており, CoSTEPを象徴する活動である. 各回の詳細はCoSTEPウェブサイトを参照. <https://costep.open-ed.hokudai.ac.jp/event?keyword=science-cafe>. 過去の一部のサイエンス・カフェについてはYouTubeでも視聴可能. https://youtube.com/@CoSTEP_HU (2023年7月30日閲覧).
- 10) 「いいね! Hokudai」は北海道大学の魅力を学内外に発信するとともに, 学術と社会の課題を共有するためのウェブマガジン. 2012年10月1日開設. Facebook ページおよびTwitter (現X) を入り口として利用している. https://costep.open-ed.hokudai.ac.jp/like_hokudai/ (2023年7月30日閲覧).
- 11) 『科学技術コミュニケーション』(JJSC)は誰でも投稿でき, 北海道大学のリポジトリ HUSCAP で誰でも閲覧できる. <https://costep.open-ed.hokudai.ac.jp/jjsc>. 創刊のねらいは杉山 (2007) を参照. なお, 「CoSTEP ジャーナル」と呼ばれることもあるが, 編集委員会メンバーはCoSTEPスタッフに限ってはいない.
- 12) リカレント教育推進部は, CoSTEPと同じ大学院教育推進機構に2022年4月に設置された組織. 新規リカレント教育プログラムを立ち上げるだけでなく, 既存のプログラムを全学的に位置づけ支援していく. この「プログラム」の中にはCoSTEPも入る.
- 13) 例えば, 広報・社会連携本部とは, 化学反応創成研究拠点と連携して, 2021年ノーベル化学賞リスト・ベンジャミン氏に関する記事, 動画, 特製パネルを制作した. <https://costep.open-ed.hokudai.ac.jp/news/20001> (2023年7月30日閲覧).
- 14) 北方生物圏フィールド科学センター (FSC) とは, 「いいね! Hokudai」の記事制作や, FSC施設をつかった展示企画, 研究林での映像制作演習の実施で連携. 産学・地域協働推進機構とダイバーシティ・インクルージョン推進本部とは, それぞれ2021年4月からと2022年12月から「いいね! Hokudai」の記事制作で連携している.
- 15) CoSTEPの上部組織オープンエデュケーションセンターと札幌国際芸術祭 (SIAF) と連携協定を締結し, 北大の研究者がSIAF 招聘アーティストと共に, 研究とアートを融合した企画を実施している. <https://costep.open-ed.hokudai.ac.jp/news/25572> (2023年7月30日閲覧).
- 16) 出島組織の詳細はウェブサイトを参照. <https://www.dejima.team/> (2023年7月30日閲覧). なお筆者と出島組織サミットの倉成英俊氏を出会わせてくれたのはCoSTEP初期スタッフの岡橋毅氏である.
- 17) 2022年度の本科実習は, 対話の場の創造実習, ライティング・編集実習, グラフィックデザイン実習, ソーシャルデザイン実習, 選科はAとBがあった. ただしこの構成は年度によって変わる. 詳細および最新情報はCoSTEPウェブサイトの活動報告を参照. <https://costep.open-ed.hokudai.ac.jp/news/category/activity> (2023年7月30日閲覧). 研修科の成果は報告書としてまとめられHUSCAPで閲覧することができる. <https://eprints.lib.hokudai.ac.jp/dspace/handle/2115/64652> (2023年7月30日閲覧).
- 18) SciBaco <https://scibaco.net/> の開発経緯については奥本 他 (2023) を参照. CoSTEPではその他に, 「科学技術コミュニケーション人材協働プロジェクト」を2022年度から実施している. <https://costep.open-ed.hokudai.ac.jp/news/24584> (2023年7月30日閲覧).

文献

- Kupper, JFH., Moreno, C., Fornetti, A., 2021: "Rethinking science communication in a changing landscape" *Journal of Science Communication*, 20(3), <https://doi.org/10.22323/2.20030501>
- 小林良彦, 中世古貴彦 2019: 「科学技術コミュニケーションに求められる職務及び職能に関する試行調査:

- JREC-IN Portalに掲載された求人情報を用いた分析」『科学技術コミュニケーション』25, 3-16.
- 水町衣里 2023:「科学技術と社会をつなぐ人材を育てる」『科学技術コミュニケーション』33, 73-77.
- 小川達也 2023:「国立科学博物館におけるサイエンスコミュニケーターの養成について」『科学技術コミュニケーション』33, 79-83.
- 奥本素子, 種村剛, 川本思心 2023:「科学技術コミュニケーターをつなぐポータルサイト SciBaco.net の開発と公開」『科学技術コミュニケーション』32, 29-40.
- 大塚善樹 2018:「科学コミュニケーションとは何か—概念の見直し」『東京都市大学横浜キャンパス情報メディアジャーナル』19, 7-13.
- 標葉隆馬 2016:「政策的議論の経緯から見る科学コミュニケーションのこれまでとその課題」『成城大学コミュニケーション紀要』27, 13-29.
- 白根純人 2023:「ビジネスとしての科学コミュニケーション: ダイアログ, リサーチ, パブリケーションのサポート」『科学技術コミュニケーション』33, 85-90.
- 杉山滋郎 2007:「創刊の辞」『科学技術コミュニケーション』1, 1-2.
- 杉山滋郎 2014:「CoSTEP 私史」『記念誌 CoSTEP 10 周年のつとめ』北海道大学 CoSTEP. <http://hdl.handle.net/2115/56554>